

**北村山地区の県立高校の具体的な設置計画に係る
「地域説明会」(村山市会場) 記録要旨**

- 1 日 時 平成 22 年 1 月 25 日 (月) 19 : 00 ~ 21 : 00
- 2 場 所 村山市民会館
- 3 出席者
地域の方々 128 名
県教育庁 教育次長、高校改革推進室長、高校教育課長補佐、
高校改革専門員、高校改革推進室職員
- 4 内 容 室長より概要説明後、質疑応答
- 5 質疑応答概要

(質問・意見)

今回の計画は反対である。東根工業団地が近くにある東根工業高校を、なぜ村山市にもってくるのかわかりにくい。また、村山農業高校と楯岡高校は、村山市の財産であるが、楯岡高校を東根市にもっていくというのもわからない。

どうしても、縮小しなければならないのであれば、村山農業高校と楯岡高校を合併して、上山明新館高校のような高校にすればよいのではないか。なぜそのような発想ができないのか、不満であり再考をお願いしたい。

楯岡高校は、駅から非常に近くよい教育環境であるのに、それを使わないというのは理解できない。

(県教育庁)

平成 18 年、19 年に 2 年間かけて学識経験者、産業界の代表、教育関係者等からなる検討委員会を設置して、北村山地区の県立高校の在り方について検討をいただいた。その検討の中では、村山市にある農業高校と進学型の普通科高校は一緒にするのは適切でないという意見が出された。

検討委員会の「報告書」の中では、望ましい高校配置として、3 校案を基本とする案が出された。その「報告書」を踏まえ、北村山地区の高校配置を考えてきた。

その後、今年度の 6 月に「山形県産業教育審議会答申」が出されたが、その中で、産業構造の変化や時代のニーズに対応するために、「単科型専門高校」、「複合型専門高校」、「総合学科高校」を適切に配置し、産業教育を学ぶ場をしっかりと保障する必要があるという答申をいただいた。

この答申を踏まえ北村山地区の産業教育を考えると、本地区では農業と工業が重要であり、農業科と工業科の併置を考えた。

また、農業高校には広い実習地が必要であることから、現在の村山農業高校の実習地を動かすことは難しいと考えた。

楯岡高校については、最近特に進学指導にがんばっており、さらに進学指導を充実させるにはどうしたらよいのかということを考えてきた。北村山地区の子どもたちが山形市の高校に行かなくても、自分の進学希望を実現できる高校をどうすればよいのかと考え、並行して検討していた「山形県中高一貫教育校設置構想」を踏まえ、他県の中高一貫教育校の状況も調査しながら、どの市町村に設置したらよいのかということと比較検討し、東根市が適地であると考えた。

こうした検討の背景にあるのは、中学校卒業生数の減少と校舎の老朽化がある。

(質問・意見)

北村山地区の県立高校の再編整備に係る検討委員会で参考にした、高校教育に関するアンケート調査によれば、中学生も保護者も普通科に進学したいという回答が圧倒的に多かった。楯岡高校は、これまでそうした地域のニーズに応え確かな実績をあげてきた。さらに、楯岡高校は北村山地区の中心にあり、駅から近く利便性が高い場所にある。

北村山地区の高校再編整備の中で、新たに併設型中高一貫教育校を設置するとするならば、楯岡高校に県立中学校を併設して、進学指導の充実を図ると考えるべきではないか。

(県教育庁)

東根市を内陸地区に設置する併設型中高一貫教育校の設置場所とした理由は、これから述べる3つの視点で、山形市及び内陸地区の6ブロック（東南村山地区、西村山地区、北村山地区、最上地区、東南置賜地区、西置賜地区）の中で、児童生徒が多い7市への設置を比較検討した。

1つめの視点は、将来にわたり生徒を確保でき、広域的に入学者を確保できる場所、2つめは、他地区に多くの生徒が流出し設置効果の高い場所、3つめは、中学校を選択できるようになる場所である。この3つの視点から、東根市が全ての項目に該当した。

北村山地区から山形市の進学型の普通科高校へ通学している生徒達が楯岡高校に入学すれば、楯岡高校もパワーアップして、かつての伝統をさらに光り輝かせることができると考えた。その時に単に「楯岡高校が変わります」とPRしても、なかなか理解されるのは難しい。中高一貫教育を導入して全く新しい進学型の普通科高校として、山形市に行かなくても自分の進学希望が実現できる高校をつくりたいと考えた。

(質問・意見)

なぜ高校の統廃合を伴う高校再編整備が必要なのか。少子化が背景にあることは理解できるが、どのように検証してきたのか説明して欲しい。それがないと、子どもの数が減っているのに、学校と教員が多いので、お金がもったいないから減らしますとしか聞かえない。

学校の適正規模を4~8学級としているが、科学的な根拠があるのか。少ない方が、生徒一人ひとりに目が行き届いた教育ができるのではないかという研究結果もあるようだ。

小学校、中学校に導入されている「さんさんプラン」を高校にも導入すべきではないかと考えるが、どのように考えているのか。

このたび設置する中高一貫教育校は、入学者の決定をする時に、学力検査をしないという説明であったが、適性検査や作文をやって、他の進学型の普通高校にいかなくてもよい進学型の普通科高校をつくるのだという考え方なのであるから、間違いなく受験競争が低年齢化し、適性検査や作文対策の訓練が裕福な家庭では行われる。裕福な家庭は、中高一貫教育校に入学でき、そうでない家庭は入学できないということも生じる懸念がある。併設型中学校を不合格になる生徒も出ることから、不合格になった子どもは心の傷を持つと思う。そうしたことをしてはならないと考えている。

村山産業高校（仮称）については、農業を目指す若者が減っている現実はあるが、これから農業は重要な分野になると予想している。工業の分野も、ものづくりのプロフェッショナルとして育成することが大切であると中小企業の方から聞いている。産業高校として一緒にしてしまえば、各学科の専門性は弱まると思う。

よって、この高校再編整備計画には反対である。

(県教育庁)

北村山地区の中学校卒業生数は減少しており、5年で約240名、6学級分が減っている。また、楯岡高校と東根工業高校の校舎は老朽化している。産業構造の変化もあり、農業でも米をつくっていれば安心という時代ではなくなっている。生徒、保護者の高校教育に求めるニーズも多様化している。このようなことを踏まえ、適正な学級規模（4～8学級）を確保しながら、生徒、保護者、時代のニーズに対応した魅力的な学校をつくることを目指し、高校再編整備に取り組んでいる。

例えば、校舎が古くなり、生徒が減っているからといって、今までの教育内容のままで、現在5学級規模の高校を3学級規模にして校舎を建設するのではなく、子どもたちや保護者の方々のニーズに対応した学校づくり、時代のニーズに対応した学校づくりが重要であると考えている。

適正規模についてであるが、全国で39県が4～8学級を適正規模としている。おととしまで、庄内の2学級規模の小規模校に勤務していた。理科の教員は2名しか配置されず、生物と化学の先生はいるが物理の先生はいないという状況であり、生徒が機械系の会社に就職したいから、物理の電気を習いたいと希望しても、生徒は物理を学ぶことができなかった。芸術は、隣の6学級規模の普通科高校では音楽、美術、書道から選択できたが、勤務校では、音楽と美術しか選択できなかった。2学級規模であると教育環境の確保が難しいと感じた。生徒が受けたい授業を受けられるカリキュラムをつくることのできるのは、4学級以上であると考えている。

また、部活動の面でも、同窓会から野球部が昔強かったので、野球部を作ったらよいのではないかと提案いただいても、生徒数が少ないので、サッカー一部があれば野球部はつくれないという状況もあった。中学校で卓球で活躍した生徒が入学してきても、顧問をする教員の配置ができないという状況もあった。適正規模であれば、生徒がやりたい部活動を選択できる環境を整備することが可能だ。

高校への「さんさんプラン」の導入についてであるが、小学校では担任の先生がほとんどの教科を教えるので、学級の人数を40名から33名に減らせば、先生目の行き届くなど効果は高い。しかし、高校は、教科ごとに指導教員が違い、科目を選択して学習したり、習熟度別学習などにより、高校でもかなり少人数教育が実施されている。

産業高校については、村山農業高校を卒業して、すぐに農業に充実する生徒は1%以下である。入学定員は3学級であるが、定員を割っている状況である。このままの状態ではさらに小規模化してしまうかもしれないが、5学級の産業高校として整備すれば、総合選択制を導入して、農業科、工業科、商業科の生徒が他学科の科目も学べる環境を整備できる。また、農業の6次産業化と言われているような、産業の総合化に対応できる人材を育成し、日本の農業をもっと活発にしていかなければならないと考えている。そのために、生産、加工、付加価値を付けて販売、ということをして1つの学校で学べる教育環境を整備したいと考えた。

工業に関しても、どのようなものをつくれればよいのかという発想が必要とされており、その大切さを実感させることや、実際に技術を工夫してみることは、農業科や商業科と併置することにより、教育効果は高まると考えている。

(県教育庁)

中高一貫教育校設置に係る受験競争の低年齢化を危惧する考え方は重々承知している。ただ、全国的に中高一貫教育校の設置は増えており、東北でも、併設型中高一貫教育校、あるいは、中等教育学校を設置していないのは本県だけになっている。

本県にこれから設置する中高一貫教育校の理念は、受験競争の考え方に立つものではない。関東方面の中高一貫教育校が、東京大学への進学実績を伸ばしているという報道を目にするが、これから設置する中高一貫教育校は、東京大学などの難関大学への合格者数を競うような学校ではない。

小学生が、中学校3年、高校3年という従来の制度に向くのか、中高一貫教育校という新しい制度に向くのか、その選択は難しいことだと考えている。

小学生の親御さんが、自分の子どもに中学校から高校にかけて、どのような学習を子どもにさせたいのか等、親御さんの教育観というものが関わって、学校の選択がなされていくと考えている。

大学に合格することを目的とする学校ではなく、興味関心を持ったことをじっくり探究しながら学ぶことができる、自分のやりたいことを時間をかけて探することができる、そのような学校を目指したいと考えている。

中高一貫教育校を選択する児童や保護者に、そうした教育理念を丁寧に説明し理解を深められるようにしたいと考えている。

(質問・意見)

今回設置する中高一貫教育校は、楯岡高校を母体とするならば、なぜ東根工業高校現有地に設置するのか。既存の中学校に影響がないようにというのであれば、楯岡中学校と東根第一中学校の中間地点にすべきなのではないか。

東根市は工業団地があり山形空港もあり最近発展しているので、東根工業高校を高等専門学校に格上げすれよいのではないか。そうすることによって、楯岡高校が、併設型中高一貫教育校として村山市に残り東根市もさらに発展すると考える。

(県教育庁)

併設型中高一貫教育校の設置場所は、東根工業高校現有地と計画しており、これから設置する教育基本計画策定委員会で、中高一貫教育校の教育内容や必要な施設設備について検討することとしている。中学校と高校が両方あるのでどれだけの敷地が必要になるのかということも検討し、これから詳しいことはつめていくことになる。

高等専門学校は、ほとんど国立で、各県に最低1校は整備されているが、県立はあまり聞いたことがない。専攻科は、米沢工業高校に設置されているが、志願者が少ない状況にある。

中学校卒業生数が減少するなかで、現在の4校を残すという考え方でいくと、各校が小規模化してしまうということと、生徒の多様化、時代のニーズに対応した高校整備が必要であることを理解していただきたい。

(質問・意見)

楯岡高校が東根工業高校現有地にいくことは反対である。昨年この再編整備計画が報道され、全国の同窓生から反響があった。

県内初の併設型中高一貫教育校の設置場所として、東根工業高校現有地はふさわしい場所なのか。教育方針や部活動のことを考えると、グラウンドも中学校用と高校用の2つ必要であると考えられ、相当な敷地面積が必要だ。また、東根工業高校現有地は敷地の間に市道があり、敷地周辺にも道路があり、教育環境としてふさわしくないと考える。

楯岡高校の体育館は耐震化工事が進められており、合宿ができる同窓会館もあり、立派なグラウンドもある。移転するのであれば、楯岡高校の跡地利用、現有施設の有効活用も含めて検討していただきたい。

開校まで6年かかるという説明であったが、開校までの手順を説明して欲しい。教育基本計画策定委員会のメンバーはどのようになるのか。我々には伝統ある楯岡高校の歴史を継承していく責任があるので、策定委員会に同窓会の意見を反映できるようにしてもらいたい。

(県教育庁)

中高一貫教育校の部活動に関する活動スペースについては、現在の高校より広く必要であると考えている。ちなみに、東根工業高校の敷地は、約56,000㎡で、楯岡高校は約36,000㎡である。ただ、教育は百年の計と考えているので、教育基本計画策定委員会で、教育内容を検討し、その教育を実践するための敷地、校舎、設備について検討していきたい。

開校までの詳しいスケジュールについても、教育基本計画策定委員会で検討していく。策定委員会のメンバーは、大学教授等の学識経験者、教育関係者、市町村行政関係者を考えており、同窓会の意見は学校を通じて寄せていただきたい。

(県教育庁)

併設型中高一貫教育校の設置場所については、東根工業高校現有地の敷地面積は、決して狭い面積とは考えていない。

本日は、県内初の併設型中高一貫教育校で子どもたちが夢と希望を持って学ぶ環境として、あるいは、山形らしい教育理念を踏まえた子どもたちの育成を考えたときに、あの場所が理想なのかどうかという様々な意見をいただいた。

現段階では、校舎の有効活用の観点から、東根工業高校現有地としているが、これからの策定委員会等で地域の方々の意見もお聞きしながら、さらに検討を加えていきたい。

(質問・意見)

村山産業高校(仮称)を村山農業高校現有地としているが、交通の利便性が悪いと考えている。村山駅から村山農業高校まで約2.7kmあり、定員割れの原因は、交通の利便性が悪かったからだと思う。その場所に、村山産業高校(仮称)を設置しても、子どもも親も通学に不便であると考えのではないかと。特に冬の通学が大変である。

新しく村山産業高校(仮称)を設置するのであれば、国道13号線の西側など、子どもも親も通学に便利だと思う場所に設置して欲しい。それが無理なのであれば、交通の利便性がよい楯岡高校現有地に校舎を建設し、実習の時だけ、村山農業高校の農場で学習するようにすればよいと考える。

村山産業高校(仮称)を村山農業高校現有地に設置したら、すぐに定員割れををすると思う。百年後の村山市のことを考えて設置場所を考えていただきたい。

(県教育庁)

農業高校は実習等の場所というのが大事であり、農場を移すというのは難しいと考えている。確かに、交通の利便性は大切であるので、村山農業高校まで生徒が安全に通えるように、村山市にお願いしたいと考えている。

(質問・意見)

東北地方の中高一貫教育校9校を調べたが、敷地面積が50,000㎡以下は1校のみで、だいたい70,000㎡~80,000㎡であった。東北地方で一番最後に作る中高一貫教育校なのだから、しっかりつくっていただきたい。山形や新庄からも通学してることが想定できるので、駅から近いということも大切にして欲しい。

楯岡高校を母体としてというのが、わかりにくいので説明して欲しい。実態にあわなくなる校名や教育課程等は変わると思うが、その他のことは原則的に継承されていくと考え

てよいのか。

(県教育庁)

概ねそのように考えている。村山農業高校、東根工業、楯岡高校はそれぞれに歴史と伝統があり、特色ある人材育成に取り組み、地域の内外に有為な人材を輩出してきた。

それは各校が、これまでも社会の変化や要請に対応した教育を積み重ね、不易の教育理念を大切にしてきた賜物と理解している。

単なる「移設」でなく「母体として」としたのは、そうしたより良き教育理念を踏まえて新しい高校づくりを進めていきたいという考えからである。

(質問・意見)

楯岡高校出身で3年前まで、東京に住んでいた。東京からも楯岡高校を心配する声が聞こえてきている。

同窓生としては、楯岡高校が現有地になくなり、中高一貫教育校が東根市に設置することは、これからどうやって学校を応援していくのか、どうやって楯岡高校への思いを継続していけばよいのか、さびしい気持ちである。

人口動態だけで、教育を考えてよいのか疑問である。人口だけで学校を決めてしまうのは間違いではないか。楯岡高校をベースにするというのであれば、もっと同窓会のことを考えて、楯岡高校の充実を考えてほしい。

(県教育庁)

同窓生の母校を思う気持ちやつらい思いをしていることは、よくわかるが総合的に勘案して、今回の計画の策定に至っている。

現状のままで推移していけば、各学校の規模は小さくなってしまうことは、中学校卒業生数の予測から見えてきている部分である。

如何ともしがたいことであるが、その中でさらに活力を維持しながら、新しい姿の学校をつくっていくというのも、県教育委員会としての22世紀に向けた責務であると考えている。

これまでの進め方については、県教育委員会は検討委員会を設置して2年間検討し、地域の方々の声を聞きながら、さらに2年かけて教育庁内で検討し、都合4年かけて今回の計画の策定に至っている。

北村山地区に魅力ある学校をつくっていくということでは、歴史と伝統のある楯岡高校の精神や魂、同窓会の思いを踏まえ、新しい高校として、輝かしい学校を前向きにつくっていこうとすることが大切であると考えている。

先程、中高一貫教育校は本当に素晴らしい学校にしなければだめだと叱咤激励をいただいた。この北村山地区全体のことを考えて、この地区に魅力ある県立高校と県立中学校を整備するために精一杯努力していきたい。

(質問・意見)

東根市に設置予定の中高一貫教育校に関して、地元東根市から設置要望が強くあったという説明があったが、その経緯と、村山市からはどのような要望があったのかお聞きしたい。

(県教育庁)

中高一貫教育校に関しては、外部有識者等による検討委員会を設置し平成18年、19年の2年間かけて検討し、平成20年2月に「報告書」をいただいている。その「報告書」を踏まえ、その後、教育庁で検討し、平成21年5月に「山形県中高一貫教育校設置構想(案)」

についてパブリックコメントを実施した時に東根市から要望書をいただいた。

一方で、中高一貫教育校の設置については、他県の状況の調査から設置場所の選定の視点を整理し、先程説明した3つの視点で東根市を適地とし、要望書もいただいていたので、地元の理解や協力も得られると考えた。

村山市からはアクションはなかった。

(質問・意見)

昔は大倉地区と楯岡地区の生徒が通学していた楯岡中学校だけで1学年370名いた。わずかに55年の間で、こんなに子どもたちの数が減ってしまったのかとさびしく感じている。

これまで、村山市には県立高校が2つあるということを誇りに感じていた。少子化を実感していたので、やがてこのような高校再編整備が行われると思っていた。

現在、村山市の人口は東根市の人口の約半分になってしまっているが、このまま県立高校2校を残してもらいたいという気持ちは山々であるが、東根市は前々から市長が先頭に立って、中高一貫教育校の設置を要望していたようで、生徒の大学進学希望が増えている状況を見るとその要望は当然と感じている。

北村山地区から東南村山地区の高校へ通学している生徒が約半分であるという説明があったが、高校授業料無償化が実施されれば、その傾向は拍車がかかると予想している。

楯岡高校は立派な高校なので、できるなら残して欲しいが、27日の東根市で開催される「地域説明会」における地元の方々の反応も興味がある。

(質問・意見)

先程の「なぜ高校再編整備が必要なのか、検証したのか」という質問への回答が不明確である。今までの教育をなぜ変えなくてはならないのか、説明して欲しい。適正規模を4~8学級としている科学的根拠も示されなかった。2学級や1学級の小規模になると、生徒が科目を選択して学べないという回答であったが、それは教員を配置すれば解決することであって、規模が小さいからだめだという根拠にはならない。高校の部活動については、北村山地区では部活動を理由に高校を選択することはない。さらに、高校では部活動の加入は自由なのであるから、別の方法で考えることができると思う。

農業高校を卒業して就農するのは、1%以下という説明があったが、農業を担う人材の育成だけでなく、植物や生き物を育てることによって、環境問題に関する教育や人格を育成する教育がなされるよう努力している。これからの農業教育はどうあるべきか、農業高校の先生方も研究している。必ずしも農業後継者にならなくても農業高校で学びたい生徒もいるので、そうした生徒のことも大切にしてもらいたい。農業教育の専門性をしっかり教える必要があり、産業高校にしてしまうと専門性が薄まると思う。他学科と併置してしまうと、今までと同じ教員数を確保して専門の教育はできないのではないかと。農業科も工業科も一緒にすることによって、専門性が薄まることはあってはならない。

(県教育庁)

専門性が薄まることを心配されているが、これから具体的な教育課程を検討する「総合選択制」は、農業科なら農業教育を、工業科なら工業教育をきっちりやって、「課題研究」や「総合的な学習の時間」という授業の中で、農業科と工業科の生徒が共通の課題を調査、研究したり、新たな課題に協力してチャレンジすることなどを想定している。決して、専門教育の基礎基本の定着が不十分になってしまうとは考えていない。

教員配置については、「標準法」という国の法律に基づいて、学級数に応じて配置される。小さい学校のよさは十分に承知しているが、生徒が学びたいことを学ぶことができる環境

を整備したい、生徒がやってみたいと思う部活動を設置して、活動させてやりたいというのが高校教員としての率直な気持ちだ。小規模校では、1人で複数の部活動の顧問をしている実態もある。

高校再編整備に関する検証であるが、地域の方々の意見を伺いながら、北村山地区の課題を整理し、生徒や保護者の教育ニーズも研究しながら、どのような学校が望ましいか考えてきた。人口動態だけではなく、教育内容についても地域の声を聞きながら検討してきた。

(質問・意見)

計画ということであるが、計画(案)なのか、計画として決まったことなのか。これから変えることはできないのか。

(県教育庁)

これは、案ではなく計画である。教育内容については、地域説明会でのご意見も参考にしながら、教育基本計画に盛り込んでいく。

北村山地区の高校再編整備に係る検討委員会設置前に「地域説明会」を開催し、その「地域説明会」での意見を参考にしながら、検討委員会において検討いただいた。また、検討委員会は、最終「報告書」をまとめる前に「中間まとめの地域説明会」を開催し、中間まとめに関する地域の方々の意見を参考に最終「報告書」をまとめている。さらに、検討委員の他にも様々な方から多くの意見をいただきながら、今回の再編整備計画の策定に至っている。

村山農業高校、東根工業高校、楯岡高校の同窓会の皆さんの母校に対する情熱は、すごく感じている。そうした思いが各高校を支えてくださってからこそ、そこで学ぶ生徒はがんばることができたと考えている。この場を借りて深く感謝申し上げたい。

ただ、昨年から他県の高校を研究する中で、京都市の商業高校のことを知った。

京都市のある商業高校は、長年、京都の商業に関する人材を育成してきた名門の商業高校であった。ところが、入学する生徒が減ってきて、同窓生の方々から、生徒のニーズに対応した学校にしなければだめだということで、「孫に、自分が卒業した高校を誇れる学校にしてくれ」と要望が出された。

この学校は、場所も校名も変え、商業科を学科改編し大学進学に対応する中高一貫教育校になった。同窓会の方々は、将来の、京都の経済界を牽引することができるような学校になったことを感謝しているそうである。「これなら孫に自慢できる」と協力してくださったそうだ。

この北村山地区においても、同窓生も含め地域の方々の理解と協力をいただきながら、生徒にとって魅力ある学校づくりを進めさせていただきたい。

以上